

日記を壊した革命*1

王 友 琴*2

(日本語訳：佐竹保子)

文化大革命は、百万単位の受難者を殺し、数えきれない書籍と文物を壊した。そのほか、文革は何を壊したのか？注目されず、意識もされていないことだが、文革は、中国人の日記を破壊した。

—

日記をつける習慣の人は多い。とりわけ学生や比較的教育水準の高い人に。日々、自分のしたこと、思ったこと、望んだことを書き、書き溜めれば命の記録、成長の軌跡となる。自らを反省し、自らの心を探る方法でもある。日記の文化は、古今東西にある。文革の後期と文革後、私は文革受難者の名前と受難の時期を記録してきたが、その中

*1 原文「摧毁日记的革命」は、香港の雑誌『领导者』（财经文摘有限公司）総第66期（2015年10月）98～115頁。

*2 王友琴氏は、Chicago 大学東亜語言文明系中文教研室主任。1982年北京大学毕业、1988年に中国社会科学院研究生院で博士学位を取得。著書に『文革受难者』『鲁迅和中国现代文化震动』等。中国語及び英語の論文に「1966：学生打老师的革命」「文革斗争会」等多数。WebPage「文革受难者纪念馆」（www.chinese-memorial.org）参照。

王氏は、訳者が1981年～1983年に北京大学に留学していた当時の“同学”である。勺園大樓（留学生宿舎）に、矢野賀子氏（現在、岐阜聖徳学園大学教授）の“同屋”として住んでおられた。王氏はきわめて聡明な女性で、訳者はただ見惚れるばかりであったが、矢野氏と同じ“同学”の劉一之氏（現在、岐阜聖徳学園大学教授）の仲介で、王氏をより深く知ることができたのは生涯の幸運だった。2014年夏、王氏は仙台を訪れ、幾本かの論文を送ってくれた。すぐにも日訳したかったが、諸事に妨げられ、王氏に済まなく思いながら諦めかけていた。だが2016年4月の熊本大地震で、2011年に体験した東日本大震災がフラッシュバックした時期、たまたま手元にあった「摧毁日记的革命」が、正気を取り戻させてくれた。「摧毁日记的革命」が、いわば「招魂」の役目を果たしたのであり、それほどに力のある文章なら、他の読者にも有効に違いないと考え、メールによる王氏の教示にも助けられ、予想外に早く日訳を完成することができた。

「摧毁日记的革命」の文体にも、付言したい。中国文学研究者で美辞麗句や古典句を夥しく知る王氏が、それらすべてを削ぎ落とし、簡潔明白な短文の集積に徹している。この文体の所以と淵源も、探求に値するテーマである。

で、往々にして人は、何が起きたかは覚えているが、いつ起きたかを覚えていないことに気付いた。記憶力に優れたインタビューーは、人物も、順序も、場面も、音も、語ってくれた。過去はあたかも映画のようにかれらの頭の中にあった。だがかれらは往往、それらが何日、何月に起きたか覚えておらず、何年に起きたかすら思い出せなかった。

受難者の死亡日確かめるため、いつもくりかえし尋ねねばならなかった。あの事件の前か後か思い出してください、と。何人もの当事者に照らし合わせても、依然結果が出なかった。あるインタビューーは言った。「日記に書いていたら、ちょっとみれば日付がわかるのに。あの頃日記をつけていなかったのが残念です」。

私はいつも思った。個人の記憶を集めれば、歴史の再現に迫れる。だが、日付のない映画のような記憶は、順次に連ねることができない。個人の記憶は正確な時間軸に置いてこそ、他人の記憶と合流して全体のシーンを形づくる。

そこで私は、インタビューーが日記をつけているかを尋ねだした。千人以上へのインタビューーで、私は気づいた。文革中ほとんど誰も、日記をつけていなかったことに。

1979年の秋、北京在住のY氏が、私に言った。「あの頃日記をつけていたら、多くを記録しただろうから、書く助けになっただろう。だが日記をつけていたら、私は今日まで生きていない。だからどちらにせよ、文革の個人的な記録などありえないのだよ」。

かたわらに、かれの妻のX氏が立っていた。彼らは私の同級生の両親だ。二人とも当時60歳近く、明るくユーモアに溢れ、表現することが好きで、高等教育を受け、若い頃から文章を書き、文革のあとも何篇かを発表していた。彼らが文革中「つるしあげ〔原文は、カギ括弧付きの「斗争」だが、訳文ではわかりやすさを期してすべて「つるしあげ」とする〕*3」に遭い、「隔離審査」され、「重い政治的過ちを犯し」たため「下放」されて、一家バラバラになったことを、私は知っていた。高校*4も卒業していない子供たちは、辺境の農村に送られ、以後も高等教育を受ける機会を奪われた。そのうちの一人は、若くして重病にかかり、今も障害が残っている。

当時の中国人の中で、彼ら一家の境遇は、もっとも悲惨というにはほど遠い。一家に、

*3 本文の〔 〕はすべて訳者の付注である。ただし（ ）は作者の文章。

*4 原文は“中学”だが、作者王氏の以下のコメントにより「高校」と訳した。作者コメントは、2016年5月～7月、訳者の問いに作者がメールで答えたもので、訳者が日訳した。「“中学”は“初中”と“高中”，あるいは両者を一緒にした学校。小学校は1～6年生，初中は7～9年生，高中は10～12年生となる。初中しかない中学も，両者ともにある中学もある。初中から高中に進級するには，試験を受けなければならない」。

殺されたり「自殺」したり（カギ括弧を加えたのは、文革中の「自殺」が通常の意味と異なるからだ）、刑罰を下され監獄に入ったりした人はいなかったから。だが、一家が長きにわたり、大きな苦しみを負ったのは明らかだ。そして長きにわたり耐え忍んで、抗議も抗弁もせず、日記に遠回しの不満すら書かなかったから、もっと悪い運命に遭わずにすんだのだ。

文革を経験しなかった人はいつも誤解する。被迫害者は、文革に反対し抗議したから懲らしめられた、と。事実は、全然違う。何千万、何百万が残酷な迫害を受けたが、反抗した人は極めて少ない。被迫害者はみな怒りをこらえて我慢し、服従していた。文革の残忍さは突出していて、日記さえ、身を殺す災いになるほどだったから。

Y氏の言うとおりの、生きたいなら（しかも快適にはなく、彼ら一家のように苦しんで）日記を書けず、日記を書くなら生き続けられなかった。日記が命に関わっていた。私の調べた事実は、それが誇張でなく、現実であることを物語っている。

1979年当時、XY夫妻を見ながら思った。文革で数知れぬ人々が死に、家族が壊されたが、彼ら一家は災難をのりこえ生きのびた。いま彼らは「名誉回復」し、一家団欒している。日記を書かず個人の記録を失ったなど、とるに足りないこととさえ言える。

けれども歴史の一部として、日記は重要だ。日記をつけたために殺された受難者の名前と、彼らを死においやった時代の空気を、記録すべきだ。そこから、文革が法律や社会規範にひきおこした「革命」的な変化、そうした変化が個人の精神にもたらしたゆがみとひずみを、知らなければならぬ。事実、さまざまなゆがみとひずみは、今の暮らしにも及んでいるのだ。

文革中、日記を調べて証拠を捜すのは、日常茶飯事だったし、当然で必要な「革命」の行為とされた。日記から拾いだした言葉が証拠となり、公開の「つるしあげ」や「現行反革命分子」という告発、懲役刑などの厳罰を与え得た。それも長期の懲役刑で、ひどいときは死刑になった。日記を証拠とするやり口が文革に始まったわけではないが、しかし文革で大々的に用いられて制度化され、深刻な日記テロをひきおこした。

それとともに、人々は日記をつけるのをやめた。何十年来つけ続けてきた人も。文革当局が日記禁止令を出したわけではない。けれども日記は、「つるしあげ」「牛小屋（牛棚）」「労働改造」などの災厄をもたらした。その威力は、文字による禁令をはるかに上回った。しかもいかなる日記が「反動」とみなされ、いかなる処罰を被るのか、明文化されていないため、人々はどのような結果をもたらされるか、知るすべもなかった。予

測不可能性が、日記テロに拍車をかけた。

調査をはじめたとき、私は「文革中の日記」を主要テーマにしていなかった。だが、調査メモが日々積みかさなるにつれ、自分が日記に関わる物語をたくさん記録していることに気づいた。その中の一つが、別の事件に芋蔓式に連なった。ごくちっぽけな、よく見かける、何の変哲もない日記が、異なる場所の、異なる時の、異なる身の上に起きた悲惨な事件を、一つに結びつけた。それらの物語は、注目されないけれども非常に重要な、文革の特徴を具現していた。すなわち、日記を壊した革命という特徴を。

二

王本中先生は、背は高からず、かなり痩せている。1996年に私が訪ねたとき、彼は北京師範大学附属実験中学校^{*5}の数学の教師で、校長だった。

彼は1963年に北京師範大学数学科を卒業し、師範大学附属女子中高校の数学教育研究班に配属された。数学を教えるほか、高校のクラス担任を兼任した。南の人で独身だったので、三人一室の教員宿舎に住んだ。

1966年、文革が中高校に広がった時、彼は校内最年少の教師の一人だった。6月2日に授業が停止されると、学校に壁新聞が現れ、どんどん多くなり、ほとんどすべての教師が名指しで非難された。ある日、彼のクラスの生徒が、学校のボイラー室の外壁に、数十枚の壁新聞を貼り出した。字数が多いばかりか、見出しも特大で、「王本中の反毛沢東思想百例」というものだった。

ことは一、二年前にさかのぼる。彼の数学の授業は人気があった。授業のほかに、数学好きの生徒を集めて数学サークルを作り、課外学習を行った。数学サークルの生徒は進歩が早く、北京市の中高生数学競技会で好成績を収め、優勝した生徒もいた。1965年下半期、彼は当時異例にも、数学教育研究室の副組長に抜擢された。副校長の卞仲耘が特に彼に話しかけた。だが時を同じくして、「文化大革命」という名詞が新聞紙上に現れ、文学作品や学校の方針への「批判」が始まった。ほどなく、彼が担任をしている高校二年のクラスの、共産主義青年団書記（中央政府の長官の娘だった）や将軍の娘などの生徒たちが、クラス委員会に反対しはじめた。彼女らが言うには、クラス委員長を

*5 前注参照。

している生徒の「出身家庭がよくない」ので、委員長になるべきではない、と。さらに、出身の良くない生徒が委員をしているのは、担任の王本中が間違った「階級路線」を貫いている結果だ、と。彼女らは、委員会をただちに改選するよう求めた。

王本中は思った。委員長の生徒は幹部の子弟ではないが、「零細企業主」家庭の出身だから、「出身が悪い」とはいえない。委員たちはほとんどが幹部の子弟だから、一人二人、幹部の子弟でない生徒がいても差し支えない。慣例で学期初めにクラス委員を選挙することになっており、今は学期半ばであるから新たに選挙する理由がない、と。

彼は、教務主任の梅樹民に指示を仰いだ。王本中より十年早く北京師範大学を卒業した梅主任は言った。「改選したいという生徒と少し話しあってみなさい」*6。二人とも、学期半ばで「零細企業主」家庭出身の委員長を替えよという要求に賛同できなかった。

クラスで二回会議が開かれ、王本中は、なぜ出身のよくない人を「重用」してクラス委員にするのかと、質問された。王本中は答えた。自分は共産党の「階級路線」をつとめて実行している。階級路線は、「出身階級を論ずるが、出身階級だけを論ずるのではなく、その人の態度を重視する」。目下、クラス委員は基本的にみな「革命幹部」家庭の出身で、態度も良いから、共産党の「階級路線」に合致している、と。彼に反対する生徒たちは言った。これは「人が類を以て集まり、物が群を以て分かれる」例だ、王本中が出身がよくない生徒をえこひいきするのは、彼自身の出身がよくないからだ、と。

こうした緊張関係の中、文革が中高校のキャンパスで始まった。若い教師では、王本中がまっさきにやり玉に挙がった。最初は「小字報」〔小型の壁新聞〕が教室に貼られ、王本中が「党の階級路線に反対し」「革命幹部の子弟を攻撃している」とあった。王本中が指導する「数学サークル」の生徒たちは、政治に無関心な「白専」〔専門バカ〕とされ、王本中は「修正主義の芽を育てている」と告発された。この内容はのちに「大字報」〔壁新聞〕に書かれて、キャンパスに貼られた。事態はますます激化し、前出の長文の大字報「王本中の反毛沢東思想百例」が貼りだされたのだ。

生徒の書いた長文大字報は、王本中の平素の言行を、一々「反毛沢東思想」とした。当時もっとも重い罪で、しかも百個もあった。これだけでは足りず、生徒たちは王本中に、日記を提出するよう求めた。

今の人は不思議に思うだろう。なんで生徒が先生に日記を出せといい、先生が従わね

*6 原文は「还是再做要做改选的学生的的工作吧」。作者コメントに「中国の幹部が常用する言い方で、“做某人的工作”は、その人と話しあって考えを変えさせなさい、という意味」。

ばならないのか、と。今の人には「個人の権利」や「プライバシー」や「推定無罪の原則」という観念があるからだ。文革は、これらの観念を認めない。王本中は日記をさしださざるを得なかった。人の安全と生存に、これらの観念がどれほど重要かよく分かる。

王本中はすべもなく、高校・大学時代から当時までの日記全八冊をさしだした。だが心に希望が残った。日記を見た生徒たちは、彼の内心を理解して「反毛沢東思想」ではないと知るだろう。だが一週間後、キャンパスにまたもや長文の壁新聞が貼られた。見出しは「王本中の反動エロ日記から、彼の反動的な世界観を見る」だった。

彼の日記を「反動」という根拠は、高校時代の記事にあった。1957年、王本中は徐州第四中高に入学した。「反右派闘争」の前であり、「新聞の自由」について同級生たちが討論した。その討論を、王は日記に書いた。のちに四中の当局が、同級生Zの言論を整理して、共産党の徐州市委員会に報告した。市委員会は、Zを「極右分子」としたが、Zが高校三年で若すぎたため、「右派分子の帽子をかぶせる」ことはしなかった。しかし大学進学を許さなかったうえ、Zを「労働教養」に送った。王本中は日記に、当時のクラス担任との会話を記していた。彼は担任に、Zの処分は重すぎると思う、と言ったのだった。

「エロ」は、王本中が日記に何度か、大学時代の女性の同級生について書いたことを指していた。

日記の中で、王本中は「反右派闘争」に反対しておらず、ただ自分の疑問を記しただけだった。異性への感情に至っては、ふつうの若者の感覚だ。日記は個人の私物だから、こうした感情を表現し整理するにふさわしい場所だ。

王本中は思った。壁新聞の批判は断章取義で曲解であるから、日記をとりもどして弁明したい、と。彼は生徒に日記を返すよう求めた。生徒は拒絶し、のちには「なくなった」と言った。彼は、当時上層部が学校に派遣して文革を指導させていた「工作組」に日記を審査してもらうよう、要求した。だがやはり、実を結ばなかった。八冊の日記は、二度と王の手に戻らなかった。

筆者は、この学校の当時の資料を集めてきた。1996年7月に、この学校を指導する「工作組」が上層部に送った「四類学校である師範大学女子附属中高の中核指導者の『ランクづけ』に関する、初歩的意見」*7の中で、彼らは、女子附属中高を「第四類学校」と

*7 原文は“四类学校师大女附中领导核心排队的初步意见”。作者コメントに“领导核心”とは、数人の最高リーダーを指す。学校の中国共産党組織の書記と副書記、校長、副校長、教務主任等を含む、「排

定め、副校長の卞仲耘と胡志濤を「四類幹部」に区分けしている。当時工作組は、あらゆる学校と教員をランクづけ、四つに分類していた*8。生徒が分類されたところもあった。その中の第四類とは、もっとも「悪い」、肅清と独裁を要する「階級敵」の範疇に属した。罪状決定の資料を見ると、工作組が提供した根拠の一つが、王本中に関わっている。

工作組は次のように書いている。

彼ら（女子附属中高の中核指導者を指す——筆者注）はいまだに、名を挙げ個人が努力するという名利思想を若者に宣伝し、修正主義の苗を熱心に育てている。卞仲耘はかつて「華羅庚〔中国の数学者。1910～1985〕のような数学者を何人か育てよう」と数学組に呼びかけ、さらに、文学を学べば将来「党委員会書記」になれるだろうと、生徒たちに吹聴している。革命的でない専門バカの教師や生徒を大いにほめたたえ、敬っている。たとえば数学教師の王本中は、地主家庭の出身で、個人主義がきわめてつよく、校内でおおっぴらに「キュリー夫人に学ぼう」と宣伝し、「この理想に向かって努力し、寝食を忘れよう」と生徒を激励している。彼の影響で、一日中勉強に没頭し、政治を度外視して、ひたすらキュリー夫人になろうとする者もいる。それなのに学校の指導者は、王が青年教師の模範だとみている。

これが「四類」にランクづけした「理由」である。数学教師の父親が地主であり、女生徒たちにキュリー夫人に学べと言った。これが二人の副校長を「敵」に区分けした根拠なのだ。こうした書きぶり、こうした理屈が、あの時代の統治者の価値基準と推測のしかたを具現する。愚昧で残忍なのだ。

しかもこの資料は、決して中高生の手になるものではない。当時、師範大学女子附属中高校の工作組組長は、もと中共ハルビン市委員会大学部の副部長であり、副組長は、

隊”は、“政治運動”を指導する際に用いる方法。運動のリーダーは、すべての職員を政治的基準によってランクづけし、彼らの“問題”が“重い”か否か、撃つべき対象か頼るべき対象かを判断する」。

*8 作者コメントに「“分類”も、“政治運動”を指導する際に用いる方法。中国共産党中央の文革を指導する文書に拠れば、四つの分類がある。すなわち、良い／比較的良い／問題はあるが教育できる／敵、である。彼らは学校の先生たちを“問題”の軽重に応じて“ランクづけ”し、四類に分けた。さらに北京の学校も四類に分けた。文革前かなり“良い”学校とされていた師範大学附属女子中等は、“第四類”学校に区分けされ“四類学校”と略称された」。

全国青年連合会の副会長だった。キャリアも等級も低くない。西城区で「ランクづけと分類」を統一的に指導していたのは、共産主義青年団中央書記の一人である胡啓立だった（胡も8月中旬に「打倒」された）。報告書の日付は、1966年7月3日。当時の上層指導者に報告された。だが、これらがどんな時に話されたか、もとの言葉がこうだったか否か、文脈はどうだったか、それらは王本人に確認されておらず、カギ括弧で引用された言葉が誰の証言によるのかも、明かされていない。

学校の指導者に対する全校規模の「摘発批判会」で、王本中は命令されて壇にのぼり「問題を釈明し」「反動組織を摘発」させられた。生徒の書いた壁新聞では、彼の名前さえ、屈辱的な「王八種」〔王^{ねとられおとこ}八^{むすこ}の種〕*9と書かれた。発音が似ているというので。女子中高の生徒が、かくも汚い連想と罵倒をなしえたのだ！文革が伝統文化を攻撃して産みだした野蛮と粗暴は、まだまだ例を挙げうる。

1966年7月中旬、工作組は、女子附属中高の先生全員を、馬祖廟小学校に行かせ「合宿訓練」をさせた。全教師がそこに住み、毎日会議に参加した。どの教師も逐一自己批判し、罪を認めなければならない。積極派の生徒も、先生のおつしあげに加わった。数学教育研究組の「特級」教師二人は、「反動学術権威」と非難された。この二人の教師は教育研究組の「もっとも悪い」に、王本中は「三番目に悪い」にランクされた。二人の老教師は、三十年以上の教歴を持ち、等級ももっとも高かったので、確実に標的に属していた。王本中は、キャリアが浅く等級も低く、運動の重点対象ではありえなかったが、しかし彼の指導した数学サークルが賞をもらい、そのうえあの日記を書いていたので「重点対象」となった。

「合宿訓練」で、どの先生もくりかえし自己批判して罪を認めねばならず、そののちようやく「関所を通る」ことができた。順番は「問題が比較的軽い」人からだが、王本中に回ってくる前に、上層部が突然、工作組を撤収すると宣言した。毛沢東が、工作組は文革をひっそりやっている、と非難したからだ。きびすを接して7月31日、学校で「紅衛兵」の組織が成立し、紅衛兵が工作組に替わって学校を支配するようになった。

1966年8月5日、学校の五名の指導者が、紅衛兵の「つるしあげ」の暴力に遭った。卞仲耘副校長は、その場で打ち殺された。教務主任の梅樹民は、釘を打ちつけたこん棒で殴られ、着ていたワイシャツの糸がすべて肉にめり込み、はがしとることができなかつ

*9 作者コメントに「王八は、妻に不倫された男のこと。王八種は、妻が夫でない男との間に作った子供」。「王本中」WangBenzhong という発音が、「王八種」wangbzhong に似ることから連想された。

た。彼はこのため、のちに心臓病になった。

8月18日、毛沢東が天安門広場で、百万人の紅衛兵に接見した。王本中の学校の紅衛兵代表である宋彬彬は、毛沢東に紅衛兵の腕章を付けた。毛沢東は彼女の名前をこう論評した。「武が必要だな」*10。会ののち、宋彬彬は名を「宋要武」と改め、学校も「紅色要武中高」と改名した。暴力は各所でエスカレートした。8月下旬、附属女子中二年の紅衛兵数名が、近くの西単〔地名〕にある「玉華台」ホテルの十八歳の女子従業員をとらえ、「流氓」〔ごろつき〕よばわりして化学実験室の柱にくくりつけ、無残にも打ち殺した。実験室は校門に近く、往来の人はみな悲惨な叫び声を聞いた。

紅衛兵は、校長や先生や校外の「牛鬼蛇神」〔妖怪変化。文革時に旧地主や旧資本家や学界の権威をたとえた〕を叩いただけでなく、いわゆる「黒五類」〔地主、富農、反革命分子、破壊分子、右派〕の家庭出身の同級生をも叩いた。王本中が担任をしていたクラスには、こうした生徒が13人いた。クラスの紅衛兵は、13人の同級生を教室の床にひざまずかせ、彼女らを「つるしあげ」た。

30年後、この事件を語る王本中は、依然憤慨していた。彼は言った。13人の同級生をこんなふう扱いながら、その後も謝らなかつたのです。クラスはまっぶたつに割れ、文革後、学校の創立記念日にも一緒に坐れませんでした*11。

謝らないのは、同級生を叩いた紅衛兵たちが、この事件を忘れてしまったからか。忘れたふりをしているのか。それとも根っから謝る必要を認めないのか。こうした謝らない人間を教育して変えるには、あまりに遅すぎる。王本中先生はわかっている。しかし、在校生が文革の歴史から学ぶことには、手助けしたいと願っている。今、彼はこの学校の責任者だ。我々の2時間のインタビューで、彼は自身の文革思想に説き及ぼした。

紅衛兵が8月18日の集会のあとにやったのは、彼らのいわゆる「社会に殺向する」*12

*10 作者コメントに「宋彬彬の名は『論語』雍也篇の“文質彬彬、然る後に君子なり”から来ている」、「当時、いわゆる“階級敵”を殴ることを“武闘”と称し、“文闘”に対置させた。後者は言葉で“批判”すること」。

*11 原文は“不能坐到一起”。作者コメントに「北京っ子の“不能坐到一起”“坐不到一起”は、双方に大きな対立があって顔を見るや喧嘩になることを意味する。中国人は同窓会が大好きだが、文革中の同窓生はほとんど集まらない。紅衛兵だった人が他のクラスメートを深く傷つけてしまったからだ」。

*12 原文は“杀向社会”。作者コメントに「1966年8月以前、紅衛兵は学校で先生や校長を“つるしあげ”た。8月以後、彼らは学校の外に出て、家捜しや殴打や焚書をすることができるようになった」、「当時、こうした変化を紅衛兵の“杀向社会”と呼んだ。『水滸伝』で、李逵が“俺杀去东京、夺了鸟位!”という。李逵の武器は二丁の斧で、彼は斧で人を殺しながら東京(下京)に行こうとした(皇帝の地位を奪いに)」。

だった。彼らは校外で人を殴打し家財を没収し、本を焼き文物をたたき割り、さらに無賃乗車券と食費と宿代を手に入れて、地方に「革命交流」に行った。北京では、8月下旬から9月初めにかけて二千名の「牛鬼蛇神」が殺され、附属女子中高のある西城区でもっとも多かった。王本中の「問題」は、尋問する者もいなくなった。8月下旬のある日、王本中とともに教員宿舎に住んでいた若い独身の先生たちは一睡もせず、こんな時に何をすべきかを話しあった。話し合った末、「修正主義教育路線」を17年間（1949年から1966年まで）行ってきたので、いまや革命すべきであり、徹底的に過去から脱却すべきだということになった。

二日目の早朝、彼らはただちに二つの「革命行動」をとった。一つは、紅衛兵の生徒たちに倣って「戦闘グループ」を立ち上げる。毛沢東の詞から「奔騰急」の語〔毛沢東「十六字令」詞三首其の二に「山，倒海翻江卷巨瀾。奔騰急，万馬戦猶酣。山，海を倒まに江を翻し巨瀾を巻く。奔騰して急に，万馬戦いは猶お酣なり。〕を探しだして自称とし、連夜この名で、何十枚もの長文の壁新聞を書き、自分たちが積極的に文革に身を投じていることをアピールした。二つめは、本を売りノートを焼くこと。本はすべて廃品買付センターに送り、一キロ数銭で売り払った。ノートは、日記帳も含めてすべて焼いた。過去と訣別し、自分を変え、趨勢にびたりとつき、時代の大勢から見放されないようにしなければならない。

往時をふりかえると、こうした野蛮な圧制と狂気じみた空気の結びつきは、理論的説得よりも、はるかに威力がある。それは本当に、一団の人々を瞬く間に変え、氣勢すさまじい革命に投じさせ、過去と訣別させるのだ。ノートや日記の焼却は象徴だ。だがそれは象徴に止まらない。もはや理性的に熟考もせず、権力の指揮棒と時代の趨勢に従うから、億万もの人々が、文革のリーダーにびたりとついていく現象が起こる。この情況への反省と警戒こそ、我々が文革から得られる、もっとも重要な教訓の一つだ。

その後王本中は、「階級隊伍の整理」*¹³等の運動を経て、「軍備」のために城壁をうがち、地下の防空壕を修理した。結婚し、子供をもうけたが、ずっと附属女子中高を離れなかった。学校は女子校ではなくなり、校名もそれにとまって変わった。三十年後、王本中

*¹³ 原文は“清理阶级队伍”。作者コメントに「“清理阶级队伍”は、文革でもっとも多く死者が出た“運動”だった。英語はCleansing the Class Ranks」。「階級隊伍」の中に隠れている悪人をCleansingするという意味。ある者は監獄に送られ、ある者は教師や幹部を辞めさせられ、ある者は農村に送られて“改造”された」。

は、北京最良・最難関の中高に戻ったこの学校の、校長に就任した。結果を見れば、文革はたいした変化をもたらさなかったかのようだ。文革前、彼は誰もが認める優秀な青年教師だった。三十年後校長に選ばれたのは、当時の評価の結果であるように見える。巨大な円をえがいて、情況は、文革が起こった時の原点に回帰したかのようだ。

しかし、不可逆の痛ましい事件が大量に、文革の過程で起きている。彼の学校は校長が殺され、四人の教師が迫害されて「自殺」し、さらに四人の教師が、猛烈な迫害から病気になり治療できずに死んだ。「出身家庭がよくない」障害のある用務員は、攻撃されて失踪した。

もう一つ、結果は明らかなのに注意を引かないことがある。1966年、王本中のクラスの生徒が八冊の日記をもち去り、不当に攻撃を加え、しかもいまだに日記を返していないのだが、その時以来王本中が、二度と日記を書いていないことだ。私が尋ねなければ、彼はこの点に触れることさえなかったかもしれない。日記を書く習慣の喪失が、彼や彼の世代の人々に、どれほどの意味を持つのか、私は今もずっと考えている。

当時をふりかえり、王本中先生は私に、次のように話した。1968年に「階級隊伍の整理運動」が始まると、彼は「監視対象」となり、「出身家庭」と「漏網右派」〔法の網を逃れた右派〕の問題を徹底的に調べられた。第三団の人々への取り調べが終わって、彼は「解放」された。第四団・第五団の人々へのつるしあげが始まり、彼らが教員宿舎の地下室に監禁されたとき、王本中はつるしあげる側に吸収された。その中核ではないが、会の時はあとについて「正直に釈明しろ」と叫び、「專案〔特別処理を要する重大案件〕組」*14に従って同僚の経歴を調査した。

1996年に彼は、当時のことで大変心が咎めている、と言った。審査される側からする側になったので、まだ信頼されてはいないけれども、「積極的に進まなければ」と感

*14 作者コメントに「專案組とは、本来司法部門で、ある事件のために設けられる特別調査グループを指す。だが文革中の“專案組”は違う。文革中、多くの人々が“階級敵”として告発された。拘禁され“つるしあげ”されると同時に、彼らのための“專案組”が設けられた。中央には、劉少奇（中共中央副主席兼中華人民共和國主席）等の專案組があり、現場のそれぞれの職場単位にも、多くの專案組が作られた。北京大学では1968年に、“重点審査”の九百余人のために九百余の專案組ができた。メンバーは学生や若い幹部教師で、最低三～五人から成る。手順は、まず対象を、職場が設けた監獄（俗称“牛棚”）に拘禁し、その後に罪証を探し、それは数ヶ月から数年かかることもあった。尋問と拘禁の間、殴打や土下座は日常だった。体と心に加えられた残酷ないじめは、“審査”中の多数を死に追いやった。“專案組”メンバーが“審査”対象の学生や同僚なので、私情を挟んだ報復がつねに発生したからだ。專案組の報告が罪状決定の根拠となったので、罪証を捏造して陥れる事態が起きた」。

じていた。北京師範大学に、「青年軍」(抗日戦争時代に学生たちが組織した軍隊で、文革の時に「反動組織」とされた)の中心組織の名簿を調査しに行き、中に自校の国語教師の名前を見つけた。その先生は当時すでに「隔離審査」されていた。王本中は、一緒に「外調」〔外への調査〕に出ていた二人とともにすぐ戻って、「重大成果」を報告し、連夜その先生を尋問して自認を迫った。王本中は言った。当時功をあせる気持ちから、その先生には大変すまないことをした、と。しかもその後、それは同名異人であるとわかったのだ。

文革の歴史の調査で、私は多くの人を訪ねた。文革中の自分のあやまちを話そうとする人は、少なかった。王本中は校長の地位にあるうえ、私とは初対面なのに、一時間話したのち、自分の「あやまち」を語りだした。私はいささか驚いた。そして思い至った。彼はあのあと二度と日記を書かなかったけれども、高校時代から教師になるまで、八冊もの日記をつけてきたことに。私はおぼろげながら分かりはじめた。当時几帳面に日記をつけた習慣と、彼の倫理観とは、深層で繋がっているのだ。

三

受難者陳沅芷を発見したいきさつは、すこぶる複雑だ。

1993年、北京二十五中高のもと生徒が私に言った。ここで1966年に、先生が紅衛兵に殺された、と。だが彼は深くを語りたがらなかったし(彼は当時紅衛兵だった)、死者の名も覚えていなかった。私はあとで調べようと記憶するしかなかった。

1998年に韋君宜〔作家。1917～2002〕が出版した『思痛録』が、文革中、紅衛兵の生徒が人を殺した事件に触れていた。「師範大学附属女子中高の校長卞仲耘同志が、女子生徒に殺された。罪状は無く、ただ彼女が指導者だったためだ。それから、分司庁中高の一人と、育英中高の陳沅芷を知っている」(『思痛録』第九章。北京十月文芸出版社)。私が「陳沅芷」の名を見た最初だった。本にはごく短くしか触れていなかったのだから、北京育英学校に詳細を問い合わせることもできなかった。手助けを申し出た育英学校の教員は、その名の先生がここにいたことはない、と言った。私は困惑した。当時韋君宜は存命だったが、すでに重篤で、私の疑問に答えることは不可能だった(『思痛録』は早くに書かれていたが、長年の努力でやっと出版できた本だ)。彼女は2002年に世を去った(残念にも分司庁中高の受難者の名は、今だに探しだせない)。

のちに、同級生だった旧友が、私の書いた「1966：生徒が先生を打った革命」を見て、舒蕪氏〔作家。1922～2009〕の奥さんは教員で文革中に殺された、と言ってきた。文革後に「胡風反革命集団」の名誉回復が行われたので、誰もが舒蕪の名を知っていた。旧友は、舒蕪の娘の住所を教えてくれた。娘は、文革後に現れた新時代の作家だった。

私は舒蕪の娘に手紙を書いたが、返事がなかったので、舒蕪本人に手紙を書くことにした。住所がわからず、手紙は出版社から転送された。当時彼は『周作人伝』というぶ厚い本を出版していた。ほどなく舒蕪氏から返事がきた。亡妻の名は陳沅芷で、北京第二十五中高の国語教師をしており、1966年9月8日に、学校で紅衛兵に殺された、と。

陳沅芷は、第二十五中高の先生だったのだ。どうりで育英学校が、その先生はいない、と言うはずだ。だが、韋君宜は間違っていなかった。韋君宜は根っからの北京っ子で、第二十五中高は1950年代以前に「育英」と呼ばれており、もともと私立中高だったのだ。

古参の共産党幹部が書いたあまたの回想録で、韋君宜の一冊だけが、何回かの「政治運動」で迫害され殺された知人の名を、すべて記していた。親戚や友人だけではない。指導幹部として（韋君宜は長年、中国最大の出版社の一つである人民文学出版社の責任者だった）、人民文学出版社が集団で湖北省の農村の「五七幹部学校」に送りこまれたとき、八名の社員がどのように迫害されて死んだかを、一つ一つ書きとどめていた。陳沅芷は、1958年に第二十五中高に赴任する前、人民文学出版社の編集助手であり、韋君宜の部下だったのだ。韋君宜は、陳沅芷のことを詳述してはいないが、彼女を忘れなかった。受難者への追憶と罪悪感。そこに起因する、生涯追隨した「革命」への批判。韋君宜の人道性と倫理性が、『思痛録』を、凡百と異なる鶏群の一鶴にしていた。

陳沅芷の死は、彼女の日記と直接に関わっていた。

1955年、「胡風反革命集団」事件が起こった。胡風とその友人との往復書簡が、「胡風反革命集団に関する資料」と題され、毛沢東自筆の批評まで添えて、『人民日報』に発表された。多勢を巻きこむ政治事件の始まりだった。舒蕪は胡風と非常に近かったのだが、まさきに胡風との書簡をさしだして「集団」を摘発したため、集団の他の人々とは違い、逮捕されなかった。だが1957年になると、彼も「右派分子」に区分けされ、人民文学出版社で降格減俸の処分を受けた。

1966年8月下旬に、毛沢東がはじめて天安門広場で百万の紅衛兵に接見したのち、北京の街では、紅衛兵がいたるところで家捜しや家財没収や殴打を行った。陳沅芷と舒蕪は、崇文区豆腐巷の家で没収に遭った。家には、舒蕪の母親しかいなかった。舒蕪は

職場の「集訓隊」(合宿訓練隊)で家に帰れず、陳沅芷は平日は第二十五中高に住み、週末に帰宅していた。

家捜しで紅衛兵は、陳沅芷の日記を見つけた。中に1959年10月1日の記事があった。その年の9月、舒蕪は八達嶺農場で、植樹の労働に参加していた。国慶節〔10月1日。建国記念日〕には北京に帰って家族と過ごせると思っていたが、9月末に、他の者は規定どおり帰郷できるが「右派分子」は帰郷できない、と発表された*¹⁵。舒蕪は手紙で家族に知らせた。陳沅芷はがっかりし、日記に少しばかり不満を書きつけた。彼女の日記はとっくに行方が知れないから、原文を見るすべはない。

紅衛兵はこれを「反動日記」だといひ、すぐ第二十五中高(西城区にある)に急ぎ、陳沅芷を崇文区の自宅にひたして「つるしあげ」、第二十五中高に戻した。

かくて学校での陳沅芷の身分はたちまち、「一般大衆」から「牛鬼蛇神」に変わった。彼女は校内で、学校が「ひっぱりだした」「反動分子」や、紅衛兵が外からつかまえてきた「地富反壞右」〔地主・富農・反革命分子・破壊分子・右派の「黒五類」〕らとともに監禁された。ほかの中高と同じく、北京第二十五中高の紅衛兵も、キャンパス内に監獄を設け、一群のいわゆる「牛鬼蛇神」をおしこめていた。彼らは監獄のドアに「教育室」と大書したが、実際はそこで、つかまえてきた人々を拷問していた(北京第十三中高では、そのような所を「赤色テロ拷問室」、北京第六中高では「牛鬼蛇神労働改造所」と呼んでいた)。

北京第二十五中高の生徒の話では、陳沅芷に対するつるしあげで、紅衛兵のボスが二つの机を重ね、高々としたその上に彼女を立たせた。「つるしあげ会」が終わると、彼らは二段重ねの机を押し倒し、陳沅芷は地面にしたたかに打ちつけられた。

陳沅芷は学校に2週間監禁され、家族と連絡がとだえた。1966年9月8日、陳沅芷は学校で死んだ。享年42歳だった。

夫の舒蕪は、職場の「集訓隊」から第二十五中高に呼びつけられた。陳沅芷のなきがらが地面に横たわり、髪はざんばら、顔に血痕があった。一人の紅衛兵が舒蕪をさとした。「陳沅芷は現行反革命で、絶食して死んだ」。彼らは火葬場の屍体用トラックを呼び、舒蕪に火葬代を出させ、舒蕪と、「教育室」に監禁されていたこの学校の先生二人に命じて、陳沅芷のなきがらをトラックにかつぎあげさせた。

*¹⁵ 作者コメントに「10月1日は中国の“国慶節”だ。農場で働いていた人々はすべて一時帰郷して家族と過ごせるはずだったが、“右派分子”は帰郷が許されなくなった」。

当時殺されたほかの人々同様、陳沅芷のなきがらは、姓名の表示もなく焼かれ、遺骨は棄てられた。紅衛兵が彼女を殴打監禁した原因となった日記も、まったくゆくえが知れない。

12年後、陳沅芷の家族は、一枚の「名誉回復」文書を受けとった。北京第二十五中高の共産党支部と「北京城区教育局党委落實政策領導小組」〔北京市教育局党委員会政策遂行指導グループ〕とが連署した「陳沅芷同志逝去についての結論に関する意見」には次のようにあった。「陳沅芷同志は、林彪『四人組』の反革命修正主義路線の迫害のもとで1966年9月に逝去した」。日づけは1978年11月。当時こうした「結論」の常套句だ。

1966年の「赤い八月」に、陳沅芷のように殺された人は、北京だけで二千人以上いた。同じころ紅衛兵は、十万以上の市民を北京から追いだし、無数の書籍を焼き、文物を破壊した。けれども文革の観念のもと、「階級敵」を殺すのは理の当然とされ、陳沅芷のようなふつうの中高教師の死は、まったく関心をひかなかった。文革が終わったあとも、この観念は続いている。1995年に私が「1966：生徒が先生を打った革命」を発表すると、一再ならず次のように質問されたからだ。こうした一般人の死を記録することに、どんな意味があるのですか。この考えが、文革被害者の記録を、抑圧している。陳沅芷の夫や娘さえ、文革後に出版した本や発表した文章で、陳沅芷に言及することがない。『思痛録』がはじめて、彼女の名に触れたのだ。

これにひきかえ文革の指導者たちは、大々的に彼らの文革を記録し、文革の思想や原則をうちたてようとしている。1966年末、大型展覧会の準備が始まった。1966年8月に開始された紅衛兵運動を展示して表彰し、暴力と迫害を肯定するためだ。その年の8月にナンバー・ツーに昇格した林彪が、「首都紅衛兵革命造反展覧会」という題字を二度墨書し、展覧の一部とした。1967年夏に、この展覧は北京展覧館（もと「ソ連展覧館」だが、ソ連を「修正主義」と非難したのち改名）で行われた。展覧物には、「首都紅衛兵が牛鬼蛇神をうち負かした主な戦利品の統計——一九六六年八月から十月までの不完全な統計」と題した大きな図表が掲げられた。「戦利品」は12種類。「銃器」、「弾薬」、「凶器」、「土地証書という変天帳〔社会変動後に備えて隠し持つ文書〕」*16、「反動の旗」*17。

*16 原文は“地契変天帳”。作者コメントに「地契は土地売買の契約書。共産党の政策は私有財産の消滅である。紅衛兵は、家捜しで昔の土地売買契約書を見つけると、“変天”（政府や社会制度をがらりと変える〔旧社会に戻す〕）後に財産を返還させるためのもののだとして、“変天帳”と称した。

*17 作者コメントに「中華民国や国民党の旗を指す」。

それらのうしろに、「反動日記詩文」がどさりと積まれ、「6820 冊 (篇)」とあった。

「6820 冊 (篇)」の「反動日記詩文」を書いた、膨大な人々。かれらはどんな目にあい、どのような痛打と虐待を受け、何人がこのために命を失ったのか。紅衛兵の「戦果」表には、上層部が回覧する別ヴァージョンがあった。その表の欄はもっと多く、北京で没収された個人家屋 52 万、紅衛兵が殺した人数 1,700 人強、北京を追放された「黒五類」8 万 5 千人強とあった。

陳沅芷は殺された中の一人だが、彼女が上の統計に入っているかどうかさえ、不確かだ。表は数字ばかりで、具体的な人名を付していない。もとより、陳沅芷の名を知る人も少ない。だが彼女が蒙ったような虐殺は、当時の北京では秘密でも何でもなく、白昼堂々鳴り物入りで行われた。紅衛兵の暴行は政府筋のメディアでくりかえし讃えられ激励され、一年後、展覧館の大会場でふたたび高く称賛された。1966 年 8 月の陳沅芷の虐殺が、かりに一部の紅衛兵の残忍さが招いたものだとしても、林彪の題字や江青らの来臨のあったこの大会場で、こうした暴行が力強く肯定され、普遍的に通用する革命の規則となったのだ。

展覧大会場の図表の下を通る人は、次の警告を感じとっただろう。「君は日記や詩文を書いているか」。

1980 年代に中共中央は、文革受難者に大規模な「名誉回復」を行ったのち、1955 年の「胡風反革命集団」を名誉回復する文書を発布した。当時私は幾度か、先輩学者たちが、陳沅芷の夫の舒蕪に論及するのを聞いた。ある老学者は重々しく言った。「恩師や友人を売るのは、『無恥』というべきだ」。

だが、論及はしたが、文章でこうした議論を発表した人を見たことがない。私は思った。舒蕪は批判できないほどの権勢家では全然ないし、その倫理的な負い目も政治問題のような聖域に属さない。なのになぜ、メディアでおおっぴらに語るができないのか。誰かが批判すれば、彼は自己弁護として、当時どんな圧力を受けていたか訴えるだろうし、それで歴史の真相を説き明かせる。だが中国では、政治や法律の観点から文革を論じることがタブーであるのみならず、幾度かにわたる「政治運動」の迫害を、倫理的な観点から批判することも、今なお許されていない。そのことが、私には次第にわかってきた。舒蕪は 1955 年に毛沢東が求めていたことを、した。だから彼を「密告した」とか「売った」とか「そむいた」とか、中国伝統の倫理観で表現し批判することは許されないのだ。

文革の発動を、政府当局の公式文書は、国内情勢に対する毛沢東の判断の「誤り」と結論づけた。この解釈が人を説得できないのは明らかだ。それゆえふつうの学者が文革の歴史についての文章や書籍を出版するのを、弾圧で禁止するしかない。まさにこのために、文革の歴史は長きにわたって言葉を濁され、日々薄れ消滅し、陳沅芷のような一般人の名は忘れさられる。身を殺す災いを招いた日記や、北京の紅衛兵が家財とともに没収した6820の「反動日記詩文」については、もはや言うまでもない。

四

1990年代、私は何度か、劉美德先生を訪ねた。彼女は、1952年に北京大学の化学学部を卒業し、1966年文革が始まったときは、北京大学附属中高の副校長で、化学の先生だった。

北大附中は、紅衛兵運動の発源地の一つだった。1966年8月1日、毛沢東は「清華大学附属中高の紅衛兵同志」に、次のような手紙を書いた。「私は君たちに熱烈な支持を表明する。同時に、北京大学附属中高の紅旗戦闘グループが、反動派に対して造反有理〔叛逆には道理があるというスローガン〕を説き明かした壁新聞、および彭小蒙同志が七月二十五日の北京大学全教職員学生大会で、彼女の紅旗戦闘グループを代表して行ったすばらしい革命演説に、熱烈な支持を表明する」。手紙の草稿の写真が、毛沢東の伝記に収められている。

「紅旗戦闘グループ」は何をしたのか。彼らは大々的に「老子英雄児好漢、老子反動児混蛋」〔おやじが英雄なら子は好漢、おやじが反動なら子はろくでなし〕という「対聯」の普及につとめた。学生・生徒を「紅五類」の子弟、「黒五類」の子弟、「灰五類」の子弟という三類に分けて、「黒五類」の子弟を「犬っころ」と称した。先生や校長や「黒五類」家庭出身の学生・生徒を殴打し、さらに校外の「牛鬼蛇神」を殴打した。

1966年8月、北京附中の紅衛兵が、付近の住民三人を殺した。呉素珍、陳彦栄、そして今も姓名がわからない高齢の女性だ。文革後、北京大学が文革で死んだ人数を調査し、彼女を「無名氏」に入れた。北大附中の人は言った。「彼女を殴った紅衛兵たちは、彼女をどこから学校に引っぱってきたか、本当は知っている。言わないだけだ」。

1966年、北京大学附中は、北京市でもっともはやく校内暴力を始めた学校の一つであるのみならず、暴力の迫害がもっとも深刻で残忍な学校だった。

目撃者は言っている。紅衛兵は学校で劉美徳を「つるしあげ」、彼女の髪をざん切りにし、運動場に這わせ、這いながら叫ばせた。「私は劉美徳です、私は毒蛇です」。紅衛兵は、痰のからまる地面の汚物を彼女の口に押し込み、さらにビニール皮で包んだ金属棒で彼女を打った。彼女は言った。この打ち方は傷跡がはっきり残らないけれど、「疼痛 骨に透る」のです、と。

8月のある日、紅衛兵たちはとても興奮して、「北京日報」の記者が学校に写真を撮りにくる、と言った。紅衛兵は、劉美徳を机に這いあがらせ跪かせた。高校三年の紅衛兵が、足で彼女の背を踏み、むかし毛沢東が地主の「つるしあげ」で「彼らを地面にうちのめし、足で踏め」*¹⁸と書いた姿勢を見せびらかした。記者が写真を撮ったのち、この紅衛兵は劉美徳を机から地面に蹴りたおした。劉美徳は当時妊娠していた。子供は先天的傷害のため、生まれ落ちてまもなく、死んだ。

当時この学校では、他の先生たちも似たような残酷な殴打と「いじめ」〔原文は「折磨」。実態が現代日本の、かくも軽い言葉には不釣り合いに深刻な「いじめ」に似ると判断されたため、敢えて「いじめ」と訳した〕に遭っていた。紅衛兵の生徒たちは、教務係の李潔を、抽斗ひきだしに跪く姿勢でおしおれ、鉄の火かき棒でめった打ちにした。李潔は二年後に学校で再度打たれ、脾臓が破裂して、死んだ。

暴力が北京の「紅八月〔赤い八月〕」にどのように拡大し、ついには8月の末、毎日何百人もが殺されるという血腥い一週間を迎えたのか、そのことを記述しようと、私は記者があの写真撮った日付を尋ねた。だが劉美徳は、覚えていなかった。北大附中の何人かのインタビューはあの場面を覚えていた。一人の女子生徒は言った。「あの時恐くて目を閉じてしまった、劉美徳のお腹の子がずり落ちてくると思って」。だが、私がこの文章の冒頭に記したとおりに、かれらは8月のどの日かを覚えていなかった。かくも恐ろしい日々、日記を書く人はいない。書いたとしても、こんなことは書かない。

こんなことを書けば、文革用語にいう「変天帳」〔前出。社会変動後に備えて隠し持つ文書〕になる。つまり「変天」〔天下ががらりと変わる。旧社会に戻る〕したら清算する、ということだ。しかも当時の家は狭くて、しょっちゅう家捜しされていたから、

*¹⁸ 原文は“把他们打翻在地，再踏上一只脚”。作者コメントに「毛沢東『湖南農民運動視察報告』（1927年3月）第五節を参照」。「私は、上海戯劇学院と美術学校の紅衛兵が自分たちの先生を“つるしあげ”ている写真を持っている。写真から、彼らが先生や校長をどのように“打翻在地，再踏上一只脚”したか見てとれる」。

こうした記録は発見され、報告される恐れがある。そうなったら、「変天」願望は誰も背負いきれない大罪だ。

劉美德は言った。前は日記を書いていたのよ、若い頃はいつも一番きれいなノートを買って日記を書いたの（ここまで聞いて、私は共感してほほえんだことを思い出す。私は今でもそうだから）。のちに他の人が「問題となる」のは日記が原因であるのを見て、二度と書かなくなった、と。北大で彼女より一学年下の女子学生劉品馨は、1953年に卒業すると助手となり、数学学部で教鞭をとったが、日記に「反動の言葉」と「反動思想」を書いたとして幾度となく「つるしあげ」られ、髪の毛を引っぱられてびんたをはられ、精神に異常をきたして、二度と回復しなかった。

劉品馨の日記のことは、胸が針で刺されたような気持ちになる。何年かのち、インタヴューノートを読みかえしたとき、「品馨」と「美德」が似た意味であるのに気づいた。名前をつけた彼女らの両親は、娘が品格高く徳性ある女性になるようにと、満腔の希望をもっていたに違いない。こんな苦難に遭うとは、想像もしていなかったろうに。

1957年に「右派分子」に区分けされたインタヴューイは、次の言葉を聞いたから日記は書かない、と言った。「思想は気体、言葉は液体、文字は固体」。文字は罪証となりやすく、言葉はその次で、思想〔考え〕は話さなければ捕まりにくい。1957年の百万の「右派分子」は、たしかにかれらが発した談話（小さな集まりでの個人的談話を含む）や書いた文章によって、罪状を決められた。彼らは毘にはまり、酷い20年余を過ごした。

文革の指導者の側に立つなら、「日記犯」を厳しく罰するのは「合理的」だ。1967年1月、「中共中央がプロレタリア文化大革命中に公安活動を強化したことに関する若干の規定」が発表され、全部で六条あった。第二条が、「およそ反革命の匿名の手紙を出し、秘密裏あるいはおおぴらに反革命ビラを貼りあるいは撒き、反動スローガンを書きあるいは唱えて、偉大なる領袖である毛主席とその親密な戦友である林彪同志を攻撃し名誉を損なうことは、すべて現行の反革命行為であり、法に照らして処罰しなければならない」である。

「規定」に「反革命ビラを貼りあるいは撒き、反動スローガンを書きあるいは唱え」という。しかしふつう、こんなことをして無駄死にする人などいるはずもない。「反革命の匿名の手紙を出し」は、文革中ごく少数あった。その結果は、独裁機構の絨毯爆撃式の搜索だ。しかも当時、授業停止や操業停止で生じたたくさんの「革命群衆」が協力し、とりしらべは残酷だったので、検挙率は高く、かえって新たな弾圧の口実となった。

1957年の言論統制で、人々はすでに、共産党の要求に合わないいかなる言葉も絶対他人に話さないよう訓練されていた。細心の注意を払い、「禍が口から出る」のを避けていた。いかなる批判も公開せず、1959年～1962年に数千万の餓死者がでる明らかな人災が起きて、誰もおおっぴらに批判しなかった。こうした状況で、継続して「階級敵」を掘りおこし「階級闘争」を進めるには、人々のプライベートな作品や日記の中に、「罪証」を探すしかない。公衆の面前で本心を口にしなくなっても、日記になら書くことがあるからだ。しかも1966年8月に紅衛兵が北京で数十万戸の家財を没収すると、家捜しが随意にできるようになり、日記類は、人目はばからず掠奪できた。

「現行反革命」は、文革の重点的な打撃目標の一つだった。1990年代に、1969年生まれで大学院に学んだ人が私に尋ねた。「犯罪行為の最中に捕まった『反革命』が『現行反革命』なのですか?」。彼女の理解は間違っている。文革後に小学校に入学した人が、この言葉を理解できないのは、あきらかによいことだ。少なくとも彼女の時代にはもう、小学生を動員して「反革命」をつかまえることなどなかったから。だが文革時代、この言葉は子供でも知っていた。子供を動員して「現行反革命」を捜し「つかまえてつるしあげ」ていた。「現行反革命」は、いわゆる「歴史反革命」に対するものだ。後者は、1949年の共産党執政以前に旧政府の役人や国民党のメンバーだった人を指す。では何が「現行反革命」か。想像もしたがたいが、かれらは日記にいささか不平を書きつけたにすぎなかった。

劉美德先生は言った。今は「能率手帳」しか持っていない、しなきゃならない事とした事を書きとめるの、それだけよ。そして彼女はきっぱりと言った。「能率手帳」は日記とは違うわ。

五

鄭培蒂先生は、1962年に北京大学欧米語学部の英語専攻を卒業し、助手になって一般英語を教えた。彼女は幼い頃から日記をつけていた。夫は大学の同級生で、当時チベットに派遣されていた。かれらはひんばんに文通した。チベットは、遠い。前の手紙の返事が届かないうちに、次の手紙が出された。だからかれらは、通し番号で管理する方法を採った。どの手紙にも番号を打ち、手紙での会話がいきちがうことはなかった。文革が始まると、年配の役つき教授が「摘発」され「つるしあげ」られた。鄭先生たちは若

くて重要な対象ではなかったが、ほかの人に対する恐ろしい行為を見て、緊張した。

1966年夏、7月か8月のある日、夫が帰省した。二人は北大キャンパスの紅湖プールのほとりで、彼女の大学時代からの日記と、夫婦の間の手紙を、すべて焼いた。通し番号の手紙は、二人のもっとも大切なものの一つだった。以後、鄭培蒂は日記を書かなくなった。二度と書かなかったから、彼女は日記をいつ焼いたのか覚えていない。

彼女の中高時代の日記は、両親の家にあった。鄭先生の中学校は、北京第三女子中学だった。私の『文革受難者』に出てくる、女三中の孫歴生先生の悲惨な境遇は、彼女がはじめて私に教えてくれた。それが、彼女と話した最初だった。彼女の、不正への敏感さと受難者への同情は、私に強い印象を与えた。彼女の両親が家捜しにあったとき、彼女の日記が父親の職場から奪いさられた。父親は北京市建築委員会の技師で、家捜しした人はおそらく、娘の日記を父親のものと思ったのだ。鄭培蒂は幼い頃、新しい紙幣を集めるのが好きで、新紙幣が手に入ると使うにしのびず、日記帳に挟んでいた。のちに「政策遂行」〔第三章を参照〕されたとき、日記帳が父親の職場から戻ってきた。だが日記に挟まれていた新紙幣はすべてなくなっていた。他人の日記を捜索し検査した文革の「積極分子」には、こんな醜行もあった。

日記を失い、日記を書かなくなったため、文革時代を回想するには、個人的な大事や公の記録にある社会的大事件をめやすとするしかなかった。たとえば、彼女が第一子を産んでちょうど一ヶ月のころ、ある日の正午に、北大欧米語学部の学生が大挙して彼女の両親の家になだれこみ、彼女を二階から引きずりおろし、トラックに押しこめた。同時にほかの学生が残って家捜しを始め、日記や手紙やノートやアルバムをすべてひっくりかえした。彼女はトラックに押しこまれて、北大に拉致された。北大の南門で車をおりると、後ろから誰かが、ズックの袋を彼女の頭にかぶせ、さらに誰かが棍棒を押しつけた。何も見えないまま、彼女は棍棒に引っぱられて建物に入り、二階にのぼり、部屋に入った。頭上のズック袋が外された。北大のキャンパス内で、子供を産んだばかりの28歳の英語教師を、袋で覆って何の役に立つのか。あきらかにこれは、実際の必要からではなく、虐待願望を満足させるためになされた。

彼女は、学生と当時の欧米語学部「革命委員会」の責任者に尋問され、さらに指紋押捺を迫られた。日常生活で指紋押捺を求められることなどなかったから、彼女は深い屈辱と衝撃を感じた。夜は、その建物の小部屋に閉じこめられ、手足を縛られて動けなかった。その日は、1968年5月17日だ。子供の生まれた日に近かったので、覚えていられた。

その後、彼女は北大の「牛小屋」に押しこまれた。そこはもともと応急の外国語教室で、1968年の「階級隊伍の整理運動」の時、キャンパス内監獄に建てかえられ、200名以上の北大教職員が監禁された。1990年代には、そこに壮麗なサッカー考古芸術博物館が建てられた。

1968年6月18日、「牛小屋」に監禁された人々が、「会議」に呼びだされた。未名湖畔の臨湖軒を起点として、キャンパスの通路の両側に、途切れなく何百メートルも人々が列をなした。それらの人々は棍棒や木の枝や銅バックルの皮ベルトを手に、「牛鬼蛇神」たちの行列をはさんだ。棍棒とムチが雨のように降ってきた。彼らは頭を垂れ腰を曲げ、通路の両側のたくさんの足だけを見た。暑い日だったので、彼女は半袖の単衣しか着ておらず、この「夾みムチの刑」を通りぬけると、両腕の皮膚が破れ血が出ていた。

その日は、厚い長袖とズボンを身につけていた「牛鬼蛇神」もおり、打たれても少しはましだった。だが鄭培蒂は、その日が何の日か意識していなかった。2年前のその日、つまり1966年6月18日、北京大学で学生の一部が、六十人余りの「反動組織」に暴行した。文革中、北京大学に起こった、最初の大規模な「つるしあげ」だった。トイレのくずかご〔「箕子」。用をたしたのちのトイレトペーパーを入れる籠。トイレが詰まるのを防ぐため、当時は紙を流さなかった〕をつるしあげられる者の頭にかぶせ、ひざまずかせ、服をずたずたに破いた。当時暴力はある程度抑えられたが、7月25日と26日に毛沢東の妻の江青らが北大に来て、「6・18事件」は「革命事件」だと持ちあげた。この免罪符が、1966年8月の紅衛兵の残酷な殺戮を招き、北京では数千人が殺された。北大では、こののち数回にわたって事件を「記念」し、この日を栄えある日として祝った。毎回の「記念」に「つるしあげ会」はつきもので、「興を添える演し物」だった。1968年の二周年「記念」は、もっとも凶暴で邪悪だった。

鄭培蒂は「6・18」を忘れていたため、殴打に備える長袖を着ていなかった。最近しばしば、「過去を忘れた人は必ず前車の轍を踏む」というアメリカ人作家の言葉が引用される。みごとな格言だが、いささか抽象的だ。だが鄭先生にとって、この日を忘れた報いは非常に具体的で、重い肉体的災禍と心理的屈辱という二重の懲罰となった。

鄭培蒂は一年近く監禁された——こういう不確かな時間詞を用いるのは、日記がなく、彼女が何日に釈放されたか記録がないからだ。誕生日にも監禁されていたことしか、彼女は覚えていない。誕生日は12月末だが、彼女は5月に自宅から拉致されたのだ。

しばらく大「牛小屋」に監禁されたのち、彼女は25楼〔北京大学内の建物〕に移さ

れた。そこでは、毎晩一度、外のボイラー室にお湯をもらいにいくことが許された。チベットから帰省した夫に、連絡するすべはなかった。その日、暗闇と厳寒のなか、夫がこっそりボイラー室の外で、彼女を待っていた。夫はオーバーのポケットに、金柑をいくつか入れていた。暖かい南に育つ、皮まで食べられる小さなミカンで、彼女が一番好きな果物だ。密会はたちまち「專案組」〔第二章を参照〕に見つけられ、二度と続かなかった。ただこの日の日付だけは、特別な誕生日プレゼントのために、しっかりと記憶されている。

鄭培蒂が監禁され「つるしあげ」られた「原因」は何だったのか。彼女の母かたのおじが古参の共産党員で、毛沢東の妻の江青と同居したことがあった。毛と江が結びつくはるか前だ。鄭は、ルームメイトの同級生にそのことを一度話した。そのことは事実だ。だがそうした事実の口外は、毛沢東と江青の至高無上の地位に影響を与えかねないとみなされ、彼女はたちまち「現行反革命」になった。彼女が監禁された最初の数日間、北大キャンパスから海淀村まで、「鄭培蒂が偉大なる領袖毛主席と文化革命の旗手江青同志を悪辣に攻撃した罪は万死にあたる」というスローガンが張りめぐらされた。

1980年代に、鄭培蒂はテレビで英語を教えた。彼女の教え方や態度は視聴者に好評だった。鄭培蒂がふたたび日記を書き始めたのは1982年で、16年後のことだ。日記を再開した日は忘れるはずもない、それはすでに書きとめられ保存されているから。

六

ごく少数だが、文革中も依然日記を書きつづけた人がある。北大中国文学部の王力教授が、その一人だ。原因はさまざまだ。当時彼は一級教授だったから、「反動学術権威」として文革の重点的な攻撃対象となることが明らかで、日記ごときが今さら取り調べの重点にはなり得なかったこと。1966年に彼は60歳で、日記をつける習慣が久しく根づいて変えようもなかったこと。それに彼の日記は、非常に簡潔で客観的でニュートラルで、会計簿のようなものだったこと。彼は議論せず、人物を臧否せず、個人的な感想を話さない。こういうタイプの日記は、調べられても比較的安全だ。彼は一言も話さないけれども、その行動から、記録を許さない生活など受け入れられない人であることが分かる。彼の日記にいう。

1966年1月14日、午後1:30に街に出て市政協〔北京市政治協商委員会〕^{*19}の文教班が「海瑞罷官」を討論するのに参加した。

この記録から、年の始めにはまだ、教授や専門家が一律に革命の肅清対象とされたわけではないことが読みとれる。かれらは上層部の指示で駆りだされ、京劇の「海瑞罷官」を「討論」したのだ。1965年10月に発表された、この劇を批判する文章（江青が文革の発端と自画自賛した）は、全然「討論」ではなく、被告の弁解も他の異なる見解も許さないものだったが、しかし少なくともこの時はまだ、「討論」という比較のおだやかな動詞を用いている。後のように教授たちに、ある本や劇や理論、さらには自分自身を、真っ向微塵に「徹底批判する」よう強いるものではなかった。

五ヶ月後には

1966年6月18日、工作班の張小山同志が、私は名声や地位の思想問題の対象ではなく、牛鬼蛇神であり、反動派の陸平と結託している、と言った。

この時にはもう、教授たちが「敵」に変わっている。ちょうど1950年代の地主や資本家のように。

1967年7月20日には、彼と呉組緇、魏建功、王瑤が「労働を停止せよと宣言された」とある。彼らはすべて、北京大学中国文学部の教授たちだ。1966年夏から1967年7月20日まで、彼らがずっとキャンパスの「労改隊」〔労働改造隊〕に居たことが分かる。そこから解放されてまもなく、彼らはさらに「牛小屋」に押しこめられた。押しこめられた日は記されない。

1968年12月9日の日記にいう。

今日は12月9日、忘れがたい日だ。

韓指導員が、今日から私たち五人（王瑤、章廷謙、陰法魯、林燾）の自由を回復すると宣言した。先週金曜日（12月6日）には魏建功、呉組緇、朱徳熙、岑祺祥の四人の自由を回復した。

^{*19} 作者コメントに「“政協”の正式名称は“政治協商委員会”。北京には“中国人民政治協商委員会”があり、各省各市にも“政協”がある」。

この日の日記に、彼はさらに「私は『毛主席万歳』とは言わなかったが、心の中で叫んでいた」。

筆者が日記を読んだとき、王力氏はすでに世を去っていた。後一文には、いくつかの解釈や臆測が可能だ。彼の正直な感想かもしれないし、「常套句」を書いて自分や自分の日記を守ろうとしたのかもしれない。あるいはエスプリのきいた諷刺かもしれない。当時こういう「万歳」がすでに真偽見わがちがたい儀式と化し、こうした言葉も常用のレトリックとなっていたからだ。どう解釈するにせよ、一点疑いもないのは、これはあの時代の行為の偽りない記録だということだ。取り調べられ監禁され殴られ虐められた後、反抗も怨みもできないばかりか、あなたは万歳を叫んで御恩に感謝しなければならないのだ。

当時の王力氏に、行動の選択の余地はなかった。しかし彼は、上の一事を記録して評価の余地を留め、後人に考えさせる図柄を残した。記録の内容は重要だが、記録することそれ自体も、非常に重要だ。記録は、態度なのだ。

日記はさらに、彼の自由「回復」後を記録する。

12月11日、東グラウンドでの「自白者には寛大に、反抗者には厳格に」大会に参加した。夜11時、人が戸口調査に来た*²⁰。

12月12日、「我が家のピアノ解体の経過について」を書き、さらに「我が罪行の補足説明」を清書した。

12月13日、指導者側が我々に、東グラウンド大会参加後の感想を書くよう要求した。

12月14日、午前九時十五分、中国文学部の全教員と学生が、我々九人に批判闘争を行った。(筆者注：前掲の、12月6日と9日に「自由を回復した」中国文学部の九名の教授を指す)

以上の記録が無ければ、後人には、「自由を回復した」の具体的な内実——深夜の「戸口調査」、「罪行の補足説明」、「批判闘争」の継続——が分からなかったし、当時毎日、

*²⁰ 作者コメントに「皆が寝しずまった頃に一軒一軒“戸口調査”に来たのは、客がその家に居ないか、家の者がすべて居るかを知るためだ。文革中“つるしあげ”られ殴打された人は、逃げたり友人や親戚の家に避難したりする可能性があった。“戸口調査”で彼らの逃げ道を塞いだのだ」。

北京大学の学生と教員および学校を指導する「労働者解放軍毛沢東思想宣伝隊」が何をしていたかも、知りがたかった。

1968年に始まった「階級隊伍の整理運動」は、一年余り続いた、規模は最大、時間は最長、方法はもっとも細密残酷という、つるしあげ「運動」だった。中に、「反動言論」をつるしあげる、という一項があった。当時の人はとくに、とてもとても用心深く話すようになっていたし、その上当時は録音機も無かったので(録音機は文革後に商店にあらわれ、一般人が買えるようになった)、人々の「反動言論」を証拠だてるために、「專案組」〔第二章を参照〕の配下は、あらゆる手を使った。昼夜連続して自白を迫り、恐喝し騙し利益で誘い、刑罰を用い、偽証さえでっちあげた。彼らがいっそう喜んだのは手書き文書を見つけることで、それなら罪状を定めやすいからだ。だからプライベートな手紙や日記を捜しだし、「反革命」に結びつけうる言葉を発見しようとした。彼らはこうした発見を「毛沢東思想の偉大なる勝利」「階級闘争の偉大なる勝利」と称し、獲物が多いほど手柄も大きくなった。それは、文革中死人がもっとも多く出た時期だった。同時に、こうした容赦無さと残酷さのせいで、この時期に関わる当時の記録は、もっとも少ない。

王力氏の生涯の日記で、1968年初頭から12月9日までだけが欠けているのは、あきらかに北大の「牛小屋」に監禁されていたからだ。「牛小屋」では数十人が一間に押しこめられ、土間にごろ寝させられた。王力氏と隣りあわせた教授が言った。夏のある夜、王氏は看守に呼びだされて、長いこと戻らなかった。戻ってきて、着ていた丸首の白シャツを脱ぐと、せなか一面に紫色の血痕があった、と。

王力氏の妻の夏蔚雲は、私に言った。彼は抗日戦争のとき、昆明〔雲南省の省都〕の西南連合大学で「雲南白薬」の効き目を知ったので、それを「牛小屋」に持っていったの。一緒に閉じこめられた同僚に分けてあげていたわ。「白薬」は薬草から作られ、刀傷の治療に用いられる。抗日戦争で軍隊用に大量に製造され、文革のときには、北大教授の生活必需品となったわけだ。

1968年6月18日、「労働改造区域」に監禁されていた人々が、キャンパスに引きだされ、整列して、臨湖軒から大食堂すなわち現在の百年講堂まで歩かされた。キャンパス中央の通路の両側は立ちならぶ人でいっぱい、棍棒や竹ひごを手に、中を通る「牛鬼蛇神」を殴打する者もいた。ずいぶん経ってから、王力氏は家族に、あの大規模なめった打ちは、生涯受けた最大の屈辱だった、と語った。だが、この殴打は日記に書かれて

いない。

1966年から1968年までの校内の暴力的迫害は、事実の記録を残す可能性さえ、みごとに抑えこんだ。文革の真実の記録を残せなくした、と言ってもいい（四十年後の我々も、当時ひそかに書かれた文革の記録を発見していない）。大規模な迫害は、人の生死を左右しただけではない。記録を失わせることで、当時から見た将来——すなわち現在と現在以後に、影響を及ぼしている。歴史の評価と惨劇の予防は、事実の研究と分析という基礎の上のうちたてられる必要があるからだ。

七

経験者が存命なら、たとえ日記が失われても、その気さえあれば往事を補える。けれども日記のために命を失えば、その人の生活と生活に関わる記録は、すべて不可逆の死滅に帰す。

王復新は、1964年に大学を卒業した。1966年に文革が始まったとき、湖南省の水利電力測量調査総合研究所のエンジニアだった。恋人は、湖南師範学院中国文学部を卒業した中学の先生だ。王復新が大学で学んだのは工学で、卒業後もその仕事をしたので、読書経験に乏しく、文学的教養は高くなかった。ある時恋人が、彼の「文学レベルが低いわ」となじった。王復新は、君が喜ぶならレベルを上げるよと、日記をつけだした。日記をつけて「文学レベルを高め」ようとしたのだ。しかも彼は、日記をすべて恋人に見せた。全部で四冊になった。

1970年、「反革命破壊活動に打撃を与える」と称する新しい運動が始まった。前と違うのは、それぞれの職場で多くの人を監禁しただけでなく、少なからぬ人々を正式に逮捕して留置場におしこみ、さらに裁判所（当時は「軍事官制委員会」の管理下にあった）で判決を下し、最終的に監獄や死刑場に送りこんだことだった。最初はそれぞれの工場や学校で、その新たな権力機構である「革命委員会」と「公法軍管会」〔公法軍事管制委員会〕^{*21}が、誰を逮捕するか決めた。

王復新の日記は恋人の寮に置いてあったので、彼女の同級生に読まれ、しかも「反動

*21 作者コメントに「文革前、中国の司法系統には“公安局”と“法院”〔裁判所〕があった。文革中、法律部門はすべて軍隊が人を派遣して管理したので、“公法軍事管制委員会”と呼ばれた。これが“公法軍管会”である」。

的内容」とみなされて、告発された。彼は、職場で「隔離審査」された。日記の中の詩が、「台湾の国民党反動派が大陸に反攻することを待ち望む」ものとされたのだ。王復新は、詩は自分が作ったものではない、と言った。書くことがない時、ほかの人の書き方を学ぶために、雑誌から詩文を書き写していたから。それにもし、本当に国民党が「大陸に反攻する」ことを「待ち望む」なら、日記に書くより、匿名で外国に手紙を出すか、検閲をごまかせるなら国民党に直接送ったほうがいい。彼は言った。日記を書いたのは彼女を喜ばせたいからで、台湾とは何の関係もありません。

王復新は若かったので、国民党政府のために働いた経験などあるはずもないし、国民党や三民主義青年団——当時この二つの「反動組織」メンバーを重点的に追及していた——に加わった経験もありえない。いわゆる「歴史反革命」の罪状は不可能だった。「隔離審査」の後、彼ははっきりと申し開きできると考えていた。だから監禁されても、自分に何か「重大な問題」があるとは思ってもいなかった。

同室の被監禁者は、王復新よりだいぶ年上で、「歴史反革命」だと告発されていた。王復新は、民衆大会に出よう命ぜられ、逮捕者があるようだとも聞いても、逮捕されるのはあの「歴史反革命」の年長者だと思った。その年長者に、彼は多めに着こむよう勧めた。会場から直接公安警察に送られても、着こんでいれば監獄で役に立つだろう。彼は気遣いの人だった。

思いもよらず、逮捕されたのは彼自身だった。民衆大会で、彼はみんなの前で手錠をかけられ、会場から押しだされ、長沙の留置場に送られた。弁明の機会どころか裁判も受けられず、判決書さえ受けとらぬまま、口頭で九年の懲役刑を言い渡された。罪状は「現行反革命」だった*²²。

*²² 作者コメントに「1970年8月11日の判決文は以下のものである。彼が十年の刑〔本文に「口頭で九年間の懲役刑を言い渡された」とあるが、判決文は「有期徒刑拾年」とする〕を受けた“理由”が日記を書いたことにあると分かる。〔以下、／は改行箇所〕

最高指示／有反必肅。／／長沙市南区革命委員会人民保衛組／中国人民／解放軍／長沙市公安機關軍事管制小組／刑事判決書／(70)軍公刑字第113号／／反革命犯王福新，男，29歳，官僚地主出身，もと学生，湘郷県人。湖南省水利電力測量調査総合研究所技術員。／王被告は反動の立場を堅持し，六三年以来，つねに反動日記を書き，党と社会主義制度を悪辣に攻撃してきた。六六年に公開摘発批判闘争を経たが，逆に不満を抱き，狂ったように反撃して判決を覆そうとした。今年の“三清”“三反”運動で多くの批判闘争を経たのち，ようやくその罪行を陳述した。反革命破壊活動に打撃を加え，プロレタリア独裁を強固にするために，法によって王被告を有期徒刑十年に処す。／刑期：一九七〇年八月七日から一九八〇年八月（原文は“月”字が脱落している）六日まで。／(本判決書をもって執行書に代える)／一九七〇年八月十一日／(円形公印)長沙市南区革命委員会人民保衛組／中国人民解放军長沙市南区公安機關軍事管制小組。

王復新は、湖南省北部の津市の涇澹労働改造農場で、服役した。囚人たちはきつい肉體労働に従事し、食糧も足りなかった。服役中、外のだれとも交流がなかった。面会人も手紙もなかった。ただ、小さな県で小学校教師をしている彼の姉が、何度も、五元ずつ送金してくれた。ほかの囚人たちには、とても羨ましがられた。囚人たちの家族は困窮していたし、政治的に「明確に一線を画す」よう求められていたので、囚人たち、とりわけ政治犯—— 当時は「反革命犯」と呼ばれて刑事犯と区別されていた—— は、外からの援助をほとんど得られなかったから。五元は、一介の小学校教師にとって少ない金額ではなかった。だが王復新の姉は、送金はしてくれたが、手紙はくれなかった。彼が姉に手紙を書いて外の様子を尋ねると、姉は、手紙をよこすなら送金を止めるといった。

毛沢東が世を去って二年半がすぎた1979年3月末、王復新の十年の刑期が終わろうとしていたころ、彼は「無罪釈放」を宣告され、裁判所から名誉回復釈放通知書を受けとった。

判決書〔注22参照〕と名誉回復釈放通知書から、「日記」の及ぼした役割が明白に見てとれる。

王復新の遭遇は、彼一人のものではなかった。法律文書から、文革が司法機構を通じて日記にいかにか罪を着せ、その罪がいかにか重かったかがわかる。「反動日記」という罪名が、前掲した北京政府筋の「首都紅衛兵革命造反展覧会」の大報告表〔第三章後半参照〕ばかりか、生死を判決する法律文書にも記された。日記の罪は、もはや法律の領域に入りこみ、もっとも強力でもっとも全面的な、規制と弾圧の日常手段となった。

1966年から1970年まで、文革は鳴り物入りで四年間続いた。高校生の紅衛兵が日記を書いた陳沅芷先生を殺してから、「公法軍管会」が「日記の罪」を宣告するまで、日記テロはますます系統的に、すきまなく張りめぐらされていった。

八

日記テロは、文革が終わってようやく収束していった。1978年8月10日、毛沢東が死んで二年後、中共中央組織部の「組工通信」に、「「悪攻」と告発された訴訟事件を真剣に清算せよという指示について」が発表された。「悪攻」とは、「偉大なる領袖である毛主席と林副主席を悪辣に攻撃する」の略語だ。1971年に林彪が突然失脚して急死す

ると、「悪攻」の目的語に、毛沢東一人が残った。頻繁に使われたため、「悪攻」という略称が生まれた。文革中、この罪名で危害にあった人は数知れない。「現行反革命」罪はもっとも重い罪の一つであり、「悪攻」罪は「現行反革命」の中の最重罪だった。罪人は、無期懲役や死刑に処された。1978年の「指示」は、「悪攻」と告発された五種の人々を「選別」し「是正」するよう定めていた。五種の「悪攻」の第三種が、日記に関わっている。

第三種は、次のとおり。ある理論や方針政策に対して、一定の場合や書簡や日記で、自らの見解を提示することは、党と国家において正常である。たとえ見解が間違っているとしても、民主的な討論や説得教育、批判、自己批判などの方法によって解決し、みだりに罪をきせてはならない。林彪や「四人組」が思想理論上にもたらした混乱に反対し、正確な見方を堅持した同志までをも、「悪攻」の言論をまき散らしたとしたのは誤っている。

「指示」は多くの中国人にとって、真に命に関わるものだった。「悪攻」の罪で監獄に閉じこめられ「敵我矛盾」〔敵対階級との間の根本的矛盾〕の「帽子」〔レッテル〕をかぶせられた人はずっと、名誉回復の見こみがないとされてきた。この「指示」が伝えられて始めて、王復新のような人が釈放され、出獄する事態が生じた。この罪をなすりつけられなかった人も、この時ほっとして、頭上の鋭い剣が取りはずされたことを知った。

「指示」が発せられたのは、胡耀邦が中国共産党中央組織部の部長になった時だ。鄧小平と胡耀邦は、文革後に、数えきれない被害者たちの名誉を回復し、人道に大きく貢献した。たぶん、人類史上最大規模の名誉回復だ。文革の迫害の深さと広さは史上例を見ないから。けれども彼らは、それを不正確にも「冤罪誤審の是正」と称した。「冤罪誤審」は、法律執行の過程で起こる個別的な問題だ。これに対し文革で起きたのは、系統的で大規模な集団的迫害と虐殺であり、依拠した「法」は不法だ。文革の迫害を「冤罪誤審」と称するのは全然事実にあわず、カムフラージュでしかない。だから胡耀邦は、まず根拠となる「法」(理屈から言えば、中共中央組織部の「指示」は法とみなせないが、当時はそれこそが法だった) 自体を改めてから、一つ一つの「冤罪誤審」を是正していった。

当時胡耀邦が新法を貫徹するのは、まったく容易ではなかった。党治国の例がそれを

証明する。党治国は陝西省の人で、1957年に、清華大学水利学部の学生だった。『文革受難者』に出てくる陳祖東教授と李丕濟教授は彼を教えたことがあり、両教授は1968年に「自殺」している。党治国は1958年2月に「右派分子」に区分けされ（清華大学では571人が「右派分子」とされた）、処罰として炭鉱労働に送られ、二年後に清華大学に戻って労働者となり、毎月わずか31元の賃金で（一般卒業生は56元）、どこでも蔑視された。のちに彼は、ふるさとの陝西省韓城の農村に帰り、1962年に「帽子をぬぎ」〔名誉回復し〕、銅川磁務局の労働者となった。

1970年2月16日、党治国は逮捕された。ちょうど、毛沢東の指示で1月30日に始まった「反革命に打撃を与える」運動が、ピークを迎えた時だった。逮捕されたその日に、尋問もなくすぐ死刑囚として、陝西省に報告された。上層部は、数が足りたとして、名簿で彼の直前にあった四人を認可し〔死刑に処し〕、彼を殺さなかった。1971年、彼に20年の懲役刑がくだった。20年の懲役刑は省の認可を経る必要がなく、市に報告して受理されればよかった。

党治国の罪名は「反革命集団の組織を企図したこと」だった。彼は言った。年の近い仲間と雑談し読書していただけです。彼は日記を、友人のところに置いていた。文革が始まった1966年、彼は日記に少し個人的な不満を書いていたことを思いだし、問題となるのを恐れて、友人に、日記を焼くよう頼んだ。こうして安全のために日記を焼いたのに、焼かれた日記が、災いを招いた。焼かれた日記に何を書いていたか、彼と友人は何度も「釈明」させられた。互いに告発し「反革命網」をでっちあげて親友を売るよう迫られた。彼らの仲間の李華瑩という女性は、「出身家庭がよくない」ため大学に進めず、ホテルの従業員をしていたが、昔から読書好きだった。1968年の「階級隊伍の整理」運動で、彼女は「隔離審査」され、五一ホテルの階上から飛びおりて自殺した。享年28歳、娘が8つになったばかりだった。娘は文革後、オーストラリアに去った。1970年の「反革命に打撃を与える」運動で、迫害は激化した。もし死刑囚報告名簿で、党治国の前に別の「現行反革命」の名がなかったら、彼も死刑になっていたはずだ。

文革後に「冤罪誤審の是正」が始まり、党治国は上告した（文革の時は一律に上告が許されなかった）。結果、1979年に銅川市人民裁判所は、二十年の懲役刑を十年に改めた。裁判所の文書にいう。

原審は次のとおり。党治国は五八年二月、清華大学学生であった時、反党反社会

主義の言論を散布して右派分子とみなされたが、悔悛せずに、反動の立場を堅持し、六三年にインフラ工事の企業にもぐりこみ労働者となってからは、長きにわたり反動日記を書き、敵の無線放送を盗聴し、反動言論を散布し、我が党と社会主義制度を攻撃し、我が党のさまざまな方針政策を攻撃し、プロレタリア文化大革命を攻撃し、恥知らずにもフルシチョフにへつらい、帝国主義・修正主義・反動派を粉飾し、プロレタリア独裁を覆そうとした。

党治国は一審判決を不服とし、一九八七年十二月に当裁判所と関連機関に、原審のいう反革命言論は事実ではなく、罪名と量刑が不当であると上告した。再調査により以下のように認められた。党治国は六二年以来、我々の偉大なる領袖、および我が党と社会主義体制に対して、不満から敵視するに至り、言論攻撃は悪辣で、党の運動や方針政策を一貫して攻撃してきた言論は反動的である。原審が党治国の罪名を反革命としたのは、正しい。その右派問題については、清華大学が一九七九年二月二十六日に訂正している。敵の放送の盗聴や、林彪・江青・姚文元らについての議論は、反革命罪に当たらない。原審の刑期二十年は重すぎるので、法により以下のように改める。

1. 党治国を反革命とする罪名は、変わらない。
2. 党治国を、有期懲役十年に処す（刑期は一九七〇年二月二六日から一九八〇年二月十五日まで）。

この文書では「反動日記を書く」ことが、依然重罪に当てられている。上述の胡耀邦の「指示」を、銅川裁判所はきちんと執行していないのだ。党治国は再度上告した。1980年に彼は名誉回復した。以下が判決文である。

陝西省銅川市中級人民裁判所

刑事判決書

銅中法（80）刑復字第 02 号

上告人：党治国，男，四十四歳，陝西省韓城県出身，もと銅川磁務局八十九工事部局労働者。

上記上告人は一九七一年，反革命事案で銅川市公安機関軍管組によって有期懲役二十年に処せられた。一九七九年六月十一日，銅川市人民裁判所の再審は，罪名は

反革命のまま、有期懲役十年に改めた。本人はなお不服として上告を提出し、当裁判所が審査し究明した。

原審に、党治国が一九六三年から一九六八年まで労働者であった期間、反動日記を書いたとあるのは、本人の自白に拠るのみで、証拠不十分である。反動言論を散布したのは、反革命罪とはならない。ゆえに以下のように判決する。

- 一、銅川市人民裁判所の一九七九年六月十一日の刑事判決書を、撤回する。
- 二、党治国に対して、無罪を言いわたす。

銅川市人民裁判所（公印）

一九八〇年元月二十八日

本判決が最終判決であり、上告はできない。

「悪攻」についての指示が出されて二年後、日記はようやく罪でなくなった。党治国の遭遇した苦痛はとりかえしがつかないけれども、この一点については、法律制度にどうか進歩が見られた。非常に重要な一点というべきであろう。

九

胡耀邦の「規定」が出たのは、文革が始まって12年後だ。しかし日記は、事実上文革前に罪状となっていた。1964年7月の毛沢東と甥の毛遠新の談話を、高等教育部^{*23}が文書にして通達している（1964年11月9日）。この談話が文革の発動に大きく作用した。

毛沢東：マルクスレーニン主義の基本思想は、革命を望むことだ^{*24}。何が革命か？ 革命とは、プロレタリア階級が資本家を、農民が地主を倒して、労働者と農民の連盟政権をたて、それを強化していくことだ。いま革命の任務は全うされず、結局誰が誰を倒すのかはっきりしていない。ソ連はまだフルシチョフが政権を握っておら

*23 作者コメントに「中国政府は教育部を二つの部〔日本でいえば「省」〕に分けている。“教育部”と“高等教育部”である。後者はもっぱら大学教育に関わる」。

*24 原文は“要革命”。作者コメントに「ここの“要”は“我要吃饭”“我要打人”の“要”のように、願望をあらわすものと思う」。

ず、資産階級が政権を握っている！我々の中でも資産階級が政権を保持し、生産隊や工場や県委員会や地区委員会や省委員会の中に、彼らの仲間がいる。ある公安庁長官も彼らの仲間だ。文化部は誰が指導している？映画や演劇は彼らに奉仕しており、多数の人に奉仕しているのではない！さあ、誰が指導している？マルクスレーニン主義を学ぶとは、階級闘争を学ぶことだ。階級闘争はどこにでもあり、君たちの学校にもある。君たちの学校は反革命を出しているが、知っているか？彼は十数冊の反動日記を書いて、毎日我々を罵っているが、それでも反革命分子でないのか？君たちは階級闘争を感じることができないのではないか？君たちのすぐそばに居るのではないか？反革命がいないなら、この上何を革命する必要があるか？

どこにでも反革命はいる、工場にどうしていないことがあるか？国民党の中将や少将や県の国民党書記長らがみな紛れこんでいるから、彼らがどう姿を変えようと、今こそあぶりださねばならない。どこにでも階級闘争はあり、反革命分子はいる。陳東平は君のそばに眠っていたのではないか？君たちの学校が摘発した資料を、私はすべて見た。君は反革命と共寝しているのに、まだわからないのか？！

毛沢東ははっきり言っている、「十数冊の反動日記」を書いた「陳東平」は「反革命分子」だと。当時もっとも重い罪だ。これが中国最高権力者の罪状意識なのだ。この講話のテーマは、「階級闘争」が若い人たちの「主要授業科目」であるべきだということだ。このテーマを述べつつ毛沢東は明らかに、日記を罪とする考えを伝えている。文革中に日記への嚴重処罰があったのは、毛の考えを押しひろげた結果と言えよう。

陳東平は、ハルビン軍事工程学院〔軍事工業大学〕の学生で、毛遠新の同窓だった。当時この学校は、軍事技術を研究していて、もっとも重要な大学とみなされ、学生に党高級幹部の子弟がおおぜいいた。1963年9月、公安部が「幹部子弟の墮落変質の九例」と題した資料を出版した。陳東平はその中の一例だった。

陳東平の学友が筆者に告げたところでは、学校は陳東平を除名処分にしたうえ、彼を「反面モデル」として全学生を教育した。学校側が発表した除名の最大の理由は、彼が家で病氣療養中に「アメリカの音」という放送を聞き、反動日記を書いたことだ。日記の内容は公開されなかった。結局どう「反動」だったのか、学生たちは知らないままだ。

私は、陳東平の日記がなぜ報告されたのか尋ねた。インタビューーは言った。当時学生宿舎は八人一部屋で、二段ベッドに寝ており、個人のプライベート空間がなかったこ

とが原因です。でももっと大きな原因は、密告を恥でなく名誉と考える者たちがいて、ルームメートの日記を上層部に報告しても、驚くべきではなかったことです。

インタヴューはさらに言った。陳東平の父は上將軍〔大将の下で中將の上〕で、当時大軍区〔中国7大軍区の一つ〕の司令官でした*25。陳東平は除名されたのち、監禁されたそうです。でも普通の家の子ならもっと重い罰を受けたでしょう。陳東平が文革中どうなったかわかりません。同窓生の中でも彼の噂は、以後聞いたことがありません。

もう一人のもと学生は言った。日記を書いたのは陳東平ではなく、毛遠新のルームメートでもなく、別の学生です。その学生は日記を書いたため、処分され迫害されました。毛沢東は人違いをしており、事を混乱させています。

だが、毛沢東が毛遠新に説いた話の意味は、明白で重大だ。日記は「反革命」になりうるのだ。

「反動日記」を「反革命」罪とみなすのと時を同じくして、当局は強力に「雷鋒の日記」に学ぶキャンペーンをくりひろげた。雷鋒の日記は、全篇が革命の大言壮語で、内容から語句に到るまで通常の意味の「日記」ではない。文革前夜、雷鋒のような「日記」を書くブームが巻き起こった。こうした日記は書かれた時から誰かに見せる予定で、「政治学習会議」で読まれたりする。内容と語句が当局の革命宣伝にぴたりと符合しているほか、プライバシーがないのも、雷鋒式「日記」の特徴だ。

毛沢東のさきの訓話を拝聴した甥の毛遠新は、文革中に矢のように出世し、遼寧省革命委員会の責任者になった。1969年、中共遼寧省委員会宣伝部幹部の張志新は、グループ会議で文革のやり方について異見を口にし、9月24日に「現行反革命」で逮捕された。無期懲役を言わたされた張志新は、獄中で辛酸をなめ尽くし、精神に異常をきたした。彼女は「反動の立場を堅持している」と訴えられ、さらに罪を加えられた。1975年4月3日、張志新は死刑判決を受け、ただちに執行された。瀋陽の大洼死刑場に送られて銃殺される前、彼女は後ろ手に縛られて牢から引きずりだされ、そのうえナイフでのどを裂かれていた。いわゆる「公判大会」〔民衆大会の席上で判決を当人に宣告するもの〕で、いかなる声も絶対に出ないように。死刑を決定したのは遼寧省革命委員会であり、毛遠新は、張志新らの死刑判決に加担していた。

毛沢東と毛遠新の談話は、教育機関を通して伝わっていった。紅衛兵の発祥地である

*25 作者コメントに「陳再道〔陳東平の父〕は“武漢軍区”の司令官だった。その下にいくつかの省軍区があった」。

清華大学附属中高でも、学校当局は、幹部の子弟だけの会議を特別に招集し、学習討論させた。1990年代、筆者が1966年に附属中高の紅衛兵リーダーだった人をインタビューしたとき、彼も、毛沢東のあの談話がのちの紅衛兵に影響を与えたと語った。紅衛兵は、毛沢東が文革を推進し、暴力的迫害を行う上での、重要な道具の一つだった。

十

あらゆる書き物の中で、日記は特別だ。他人に見せるために書くのではないからだ。日記を書くことは、あらゆる行為の中で、外界に影響を与えようとしない、もっとも個人的なものかもしれない。日記が迫害と監禁を招くなら、人は日記を書かなくなる。この点で文革は、思想の自由の最後の一角を崩すことに成功した。欧米の学者はヒトラーやスターリンの政治制度を「全体主義」と呼ぶ。権力が社会や個人の生活に介入する程度は、それぞれに異なっているから、「全体主義」の実質の中身もそれぞれに違う。日記の崩壊は、あきらかに中国文革「全体主義」の特徴的産物の一つである。

古代からずっと人は、未来社会の「ユートピア」や「ディストピア」を想像してきた。私は理想社会の想像図で日記の位置に言及した作家を思いだせないが、しかし「ディストピア」と呼ばれる悪しき未来社会を想像した作品なら、『1984』が日記のことを書いている。冒頭、主人公のウィンストンが、彼の部屋のテレスクリーンが届かないアルコーブに身をひそめ、日記を書く。見つかったら25年刑か死刑になることを知りながら。

『1984』の世界では、「ビッグブラザー」のテレスクリーンが、いつでもどこでも人々を監視し、専任の党員が毎日記録を改竄しており、「思想警察」があって、当然「思想犯」もいる。そこには道理に殉じる可能性さえ存在しない。党は、中世の宗教裁判所のように意見を述べさせたのち殺してくれたりはしないから。党は、公判の前に厳しい拷問にかけて受難者の尊厳をうち砕き、その後に何ごとでもしゃべらせるのだ。ウィンストンはこっそり日記を書くしかない。誰のために？ 将来のために、まだ生まれてこない人々のために、と彼は思いたい。彼は日記を書き、自分が経てきたことを記録し批評する。最後に、彼は逮捕され、破滅する。

1948年に英語で書かれたこの政治幻想小説の中に、あろうことか20年後中国の文革で起こるさまざまを見いだせるのは、決して愉快ではないが、しかし畢竟、一縷の希望をもたらす。こうした恐怖と迫害を予見できるのは、それを制止しうる可能性もあると

いうことだから。

文革をふりかえって、いつもまっさきに注目され新たな論争までまきおこすのは、何千万人もの集会、大物たちの衝突と謀略闘争、重大事件の発生、暴力と死だ。当時の人が日記を書いたかなどという問題は、ささやかすぎて、視線から外れてしまう。

日記という個人記録が失われた上、メディアには嘘と空虚が充満し、文革時代の真実の記録はあまりにも少ない。そのため、歴史記録が事実と経験からかけ離れ、文革への認識は空疎で無根拠になり、認識を深める手だてすらない。

焼かれたのは日記だけではない。暮らしと自身の存在意義に対する肯定感も失われた。暮らしの中で感じる喜び、怒り、悲しみ。事がらに対する倫理的な判断。それらがもし、記録する価値のないものとされるなら、自身の価値や意義も、どうでもよくなる。

かつてインタビューと語りあったことがある。もしもほかのことが申し分なく、たとえば食べるもの、着る服、住む家、身の安全、基本的公平さなどはあるけれども、日記を書くことは許されない、そんな社会を、私たちは受け入れることができるだろうか、と。次のように言ってもいい。もし討論と選択の余地があるなら、私たちは日記を書く自由を、衣食の満ち足りた安全と交換するだろうか。あたかも冷たく硬い銀貨を、一袋のキャンディーと交換するように。実際、文革で喧伝された理由の一つが、この革命によって、理想的な「真っ赤な毛沢東思想の新世界」に至りうる、ということだった。こうして「階級敵」に対する独裁と弾圧ばかりか、「人民」の居住や就業等に対する厳しい制限や、日記を書くことを含む自由の剥奪までもが、すばらしい社会のために支払う代価とされた。そうした代価を、すばらしい社会が必要とし、しかも私たちに選択が許されるなら、私たちは交換を望むだろうか？

だが、文革を経た人にははっきりと分かるだろう、その回答は熟慮を要しない、と。その可能性が存在しないことを知っているからだ。衣食住も安全も、日記の消滅によって改善されることなどなく、逆に日ごとに悪くなった。日記のないあの時代、食べ物も衣服も住宅も欠乏し、信頼も友情も倫理も見いだしがたかった。人々は貧困と恐怖の中で暮らし、精神と物質は同様に貧しく、頭脳と胃腸は同時に空っぽだった。

私たちは、まだ探しだせていない。思想と精神を弾圧し日記を禁ずるが、しかし生産は発達し物資は豊富で、しかも平等に助け合うという人類社会を。まさにそれゆえに、日記の歴史は、まともに記述され、検討されなければならない。

王友琴《摧毁日记的革命》日译

佐竹 保子

这是《摧毁日记的革命》(《领导者》总第66期, 2015年10月, 页98-115) 的日译。著者王友琴女士现任Chicago大学东亚语言文明系中文教研室主任。她1982年毕业于北京大学中文系, 1988年取得博士学位于中国科学院研究生院, 著作有《文革受难者》, 《鲁迅和中国文化震动》等。

此文著者长期以来从事文革事实的调查和采访, 报告了八百余名在文革中被害死的受难者的名字以及他们的被害经过。这篇文章报告了另一类不太直观的破坏, 即文革如何摧毁了中国人写日记的习惯。文中写了八名因日记而受到迫害的普通人。他们是中学教员, 大学教授, 工程师, 和工人。他们的日记被当作“反革命”罪证。他们中有两人因日记被判处长期徒刑, 一人被红卫兵学生打死。严厉的处罚使得人们在文革时代几乎全部都停止了写日记。

文革结束两年后因写日记获罪的人才得到“平反”。文章还追溯了文革前就开始的利用日记对人进行迫害的历史。通过具体细致的人和事的记录, 以及作者收集的权力当局的有关指令, 这篇文章写出了文革的未被注意而应该注意的一个方面。